

人間はどこまで動物か②

人間には生活空間としてどんな一定の環境も、特定の自然の範囲もわりあてられてはいない…人間の存在様式全体が、それとはまったく正反対に、人間によって積極的にさがしとめられた一つの自然領域のなかに特別な人間の「世界」を創りだす…動物の本能的な行動を「環境に制約された」(umweltgebunden)とよぶならば、人間の行動は「世界に開かれた」(weltoffen)といわなければならない。

—アドルフ・ポルトマン『人間はどこまで動物か』

本来、約21カ月の妊娠期間を経て誕生するはずの人間の新生児は、なぜ10カ月で「生理的早産」するのか？ この理由については、直立歩行をはじめた人間の骨格の変化や極端な脳の発達など、さまざまな見解があるようだ。実際、誕生後一年を経過した人間の子どもは、母親の狭い産道を通り過ぎるようには見えない。

とはいえ、門外漢である筆者が、ここで生物学的な議論に立ち入ることは、あまり有意義ではないだろう。はじめてポルトマンの著作を手にしたときから、筆者が興味を惹かれているのは、彼はこうした人間の存在様式こそが、本能によって定められた行動様式が著しく後退している人間のあり方を決定している、と主張していることである。

ほとんどの動物は、その誕生の時から生活すべき環境がある程度決まっている。シャチの体や行動様式は、海の中で暮らすのには適しているが、彼らは陸上で生活することはできない。もちろん、人間も水中で生活することはできないが、人は環境に適応して自らが生活する「世界」をつくりだす。環境を生活可能な空間に作り変えるなら、水も空気も存在しない宇宙空間にさえ、居住空間を作り出すことができるだろう。

環境に適合するように予め決定された本能的行動様式が、人間において著しく後退しているのは、極めて不完全な状態で生まれてきた人間の新生児は、はじめから「人間」として自然世界に生まれてくるのではなく、生まれ落ちた文化的・社会的世界のなかで次第に「人間(あるいは自分)」になるからなのである。誕生後の人間が、その中で「自分」を形成していく世界は、自然環境だけに左右されるものではない。多彩な言語や生活習慣、さまざまな社会制度やシステムが、それぞれの人間が「自分」になるための多様な「世界」を形成する。日本の地域に生まれた人間が、生得的に日本語を発音して理解するのに優れた肉体を持っている訳ではない。両親は日本人であっても、米国で生まれて育った子供は、普通は日本語より英語の方が流暢になるものだ。

*

人は人間として生まれてくるのではなく、生まれ落ちた世界のなかで自分になる。オオカミに育てられた野生児の物語を鵜呑みにすることはできないが、新生児を一切の文化的・社会的

接触から遮断すれば、言葉話すことも社会的ルールを身につけることも不可能なことは間違いない。人間はシャチのように、生まれた瞬間から泳ぎ出すことはできないのである。

人間の新生児が、大人と同じような行動様式を身につけるのには、かなりの時間がかかる。この間に、新生児は生まれ落ちた文化的・社会的環境のなかで「自分」になっていくのである。人が自分になることを可能にする、文化と社会の綱目としての「世界」は、本能的な行動様式を決定する、自然環境としての「世界」とはまったく異質なものだ。

もちろん、人間の新生児も本能によって決定された行動様式は保持している。生まれただの赤ちゃんの手に指をあてると、反射的に痛いほどの力で握りかえてくるだろう。しかし、自然環境に直結した本能によって定められた行動様式は、人間の存在を決定する主要因ではない。

「環境(世界)に制約された」(umweltgebunden)ほかの動物たちとは違って、人間の行動は「世界に開かれた」(weltoffen)ものなのである。同時代のヘルムート・プレスナーやマックス・シェラーの影響のもとで、華麗に展開されるポルトマンの人間理解は、極めて刺激的で説得力がある。

*

本能による決定が著しく後退している人間は、自分が誰であるかを決定してくれる意味の綱目としての「世界」を必要とする。後にポルトマンの影響を受けたアルノルト・ゲーレンが、こうした本能欠落動物としての人間の存在様式が、文化や社会システムの起源であると主張するように、意味の綱目としての「世界」は、自然環境としての「世界」と同じではないのである。

人間が、その動物としての特殊な存在様式から創り出す意味の綱目としての世界。ポルトマンは、「この人間の特別な世界を『文化』とよんで自然と対置してもいいだろうし、また『人工的』として自然的な環境と区別することもできよう」(90頁)と述べている。つまり、人間は「生理的早産」という存在様式の特異性によって、自然世界と直結した本能の定める行動様式からは、ほぼ自由(もちろん、完全に自由ではない)になる一方で、この自らが創り出す意味の綱目としての世界に、とらわれることになるのだ。

「世界に開かれた」自由を享受する人間は、環境(自然世界)をつくり変えることによって、無限に存在の可能性—繁栄へ向かうか、破滅へ向かうかは別にして—を拡大していくだろう。しかし、こうした人間存在の非決定性(本能による決定からの自由)は、人間に完全な自由を与えることはない。

なぜなら、何にでもなれる可能性があるということは、何も決定していないという不安に、直面することでもあるからである。